

国指定史跡新田原古墳群確認調査に伴う調査概要報告書

NYU TA BARU  
**新田原古墳群（確認調査）**

TUKA BARU  
塚原支群

**3号墳**

GI ON BARU  
祇園原支群

**47号墳**

**58号墳(62・63号)墳**  
**92号墳**

GI ON BARU  
**祇園原地下式横穴5号**

KASU GA  
**春日地区地中レーダー調査**

**1994.3**

**宮崎県新富町教育委員会**

史跡斯田原古墳群紙圖原第48号墳周辺



## 序

新富町では、総数 207 基（内、前方後円墳 24 基）を数える史跡新田原古墳群を持ちながら、これまでその学術的価値については、ほとんど顧みる機会もあまりなく、主に古墳群の保護・管理に力を注いできたところでした。近年、農業基盤整理等の事業の推進や近接する集落の生活関連整備等の諸開発計画等があり、それらの開発と文化財保存との調整が重要となってきている現在、指定時の古墳の認識と古墳墳丘以外の部分についても古墳の一部である周堀の存在が知られるようになるなど自ずと差異があり、文化財保護の立場からより詳細な資料の整備が望まれるようになりました。

本調査の結果、これまで県内の考古学・文化財関係者にもほとんどその存在を知られていなかった塚原支群の第 3 号（前方後円墳）の墳丘測量で遺物の散布は認められなかったものの古墳の形態から本古墳群中、もっとも古い可能性をもつものと注目される成果をあげ、また、祇園原支群の三つの前方後円墳（47・58・92 号）の墳丘測量では、細密な墳丘測量図の完成とともに円筒埴輪、形象埴輪片が採集され、当新田原古墳群の変遷のみならず、南九州における古墳の研究におおいに寄与するものと考えます。

当初の目的以上の調査成果をあげる事が出来ましたのは、偏に宮崎大学教育学部柳沢一男助教授をはじめ、有馬 義人・和田 理啓を中心とする考古学教室生諸氏の全面的な支援・ご協力の賜物であり、また塚原、祇園原、春日地区の地権者を初めとする地元町民の皆様の御理解とご協力によるものです。ここに心から御礼申しあげます。

平成 6 年 3 月 1 日

新富町教育委員会

教育長 清 郁雄

## 例　　言

1. 本書は、史跡新田原古墳群の保護・活用をはかるため、その基礎となる墳丘測量図や遺物等資料の整備を目的に、平成5年度に実施した史跡新田原古墳群確認調査（新田原古墳群3号ほか確認および墳丘測量調査）の概要報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

ア：調査主体 新富町教育委員会

教　育　長	清　郁　雄
社会教育課　課　長	富　田　博
〃　課長補佐	河　野　正　勝
〃　係　長	齊　藤　久　明
〃　主　任	長　友　裕美子（事務担当）
〃　主　事	有　田　辰　美（調査・事務担当）

イ：調査指導・協力

宮崎大学助教授	柳　沢　一　男（特別調査員）
宮崎大学考古学教室生	有馬　義人・和田　理啓
〃	林田　和人・南　陽子・山崎　亜実
	長友あゆみ・松田　佳子・若松　陽子
宮崎県教育庁文化課	永　友　良　典（調整担当）

ウ：調査に従事された皆さん

荒木　春美、杉尾美千子、林田百合子、中村　実、山村　辰夫、西　漸  
児玉　敏、黒木八重子、清　忠、安藤正二郎、中村　幸、岩下ヨシ子  
佐藤　敏通、平口　幸春、高正　義信、大木　恒男

3. 本書の執筆は、第三章　4. 祀園原支群の埴輪について　有馬義人君に協力いただき、  
6. 地中レーダー探査結果については報告を要約し、掲載した。その他については、有田  
が執筆し、編集は有田がおこなった。

## 本文目次

第一章 新富町の位置と地勢 .....	1
第二章 史跡新田原古墳群の概要 .....	1
第三章 確認および墳丘測量調査概要 .....	3
1. 塚原支群第3号墳（前方後円墳） .....	3
2. 紙園原支群第47号墳（前方後円墳） .....	5
3. 紙園原支群第58号墳（前方後円墳：62・63号墳） .....	8
4. 新田原古墳群紙園原支群の埴輪 .....	11
5. 紙園原地下式横穴5号調査 .....	17
6. 春日地区所在の地中レーダー探査結果について（概要） .....	21
7. まとめにかえて .....	23

## 挿 図 目 次

第1図 史跡新田原古墳群位置図	2
第2図 第3号墳墳丘平面図	4
第3図 祇園原支群古墳分布図	6
第4図 第47号墳墳丘平面図	7
第5図 第58号墳墳丘平面図	9
第6図 第92号墳墳丘平面図	10
第7図 第47号墳採集埴輪実測図	12
第8図 第58号墳採集埴輪実測図	13
第9図 第62号墳採集埴輪実測図	14
第10図 第63号墳採集埴輪実測図	15
第11図 祇園原地区地下式横穴5号遺跡位置図	18
第12図 祇園原地区地下式横穴5号遺構平面図	19
第13図 新田原古墳群（春日地区）分布図	22
第14図 地中レーダー探査解析図	24
口絵 史跡新田原古墳群祇園原第48号墳周辺	1
図版1 第47号墳全景（南東から）	25
図版2 第47号墳全景（空中写真）	25
図版3 第47号墳後円部（盗掘坑）	26
図版4 第47号墳第7トレンチ埴輪出土状況	26
図版5 第58号墳全景（上から）	27
図版6 第58号墳全景（空中写真）	27
図版7 第58号墳試掘調査状況（北→後円部）	28
図版8 第58号墳試掘調査状況（東周堤上→後円部）	28
図版9 祇園原地下式5号竖穴部	29
図版10 春日地区地中レーダー調査作業	29
図版11 第48号墳全景（空中写真）	30

## 第一章 新富町の位置と地勢

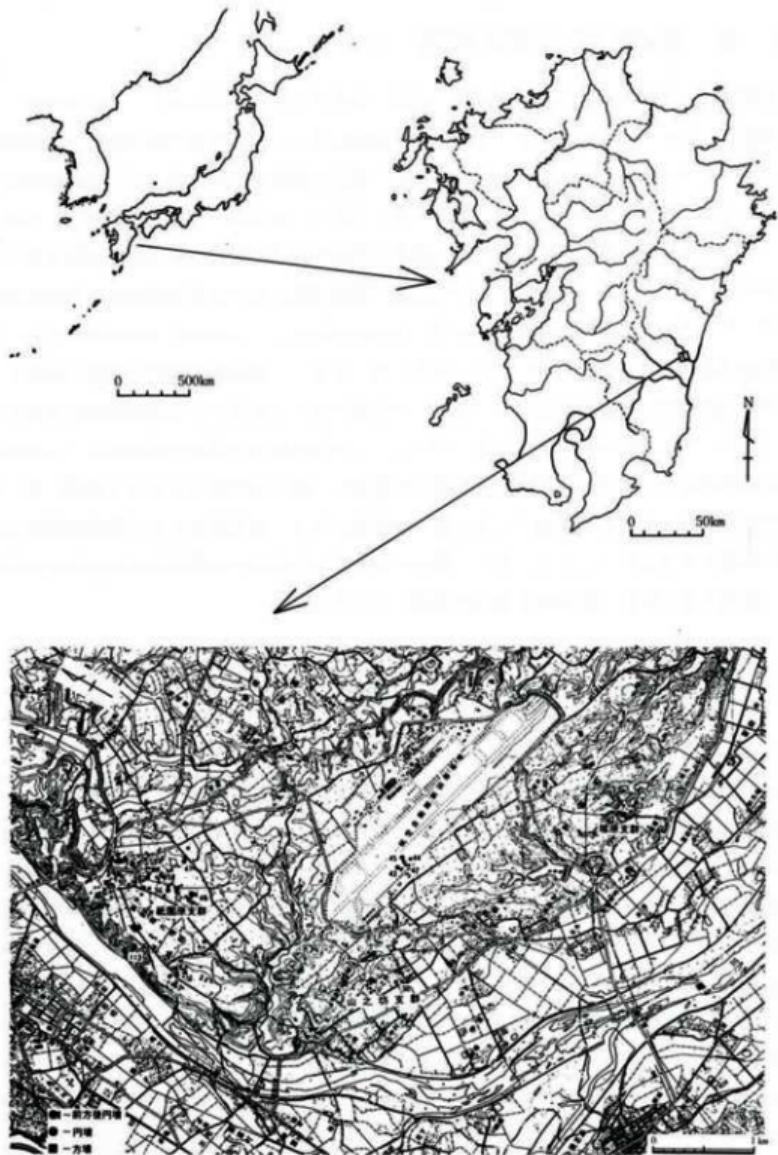
新富町は、宮崎県の中央部宮崎平野の北側一角を占める児湯郡に属し、西に西都市、北に高鍋町、南に一ヶ瀬川を界し、宮崎郡佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む。県都宮崎市より主要交通動脈となっている国道10号線・地方幹線鉄道JR日豊本線を北に約20kmと比較的交通の便に恵まれ、気候は、温暖・多雨である。町域は一ヶ瀬川左岸の主に水田やビーマン・キュウリを主体とするハウス園芸に利用される沖積平野と畑作に利用される洪積台地に占められる。このうち洪積台地は広く宮崎平野に広がる平坦地の顕著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海拔約120m）、三財原面（海拔約90m）、新田原面（海拔約70m）の三つに分けられている。なお、この洪積台地の平坦面を利用して航空自衛隊新田原基地が所在している。この町域のほとんどを占める洪積台地を大きく東西に開析して、鬼付女川がほぼ東流している。この鬼付女谷の洪積台地裾部と一ヶ瀬川左岸の新田原台地の裾部には数段の河岸段丘が発達し、最下段の段丘と河川との間には、自然堤防が発達し集落が営まれている。また旧河道と考えられる低地などが顕著に認められ、広い沖積平野が広がっている。また、鬼付女谷の出口を含む日向灘に臨む東部海岸平野には、宮崎平野と同様、数列の砂丘列が発達している。

## 第二章 史跡新田原古墳群の概要

### <調査に至る経緯>

国指定史跡新田原古墳群は、総数207基（前方後円墳25基、方墳2基、円墳180基）を数える宮崎県内第2の大古墳群で、新富町大字新田字紙園原の台地や、台地縁、台地裾部に広く分布する。これらは、大きく四つの群に分けられ、字竹ヶ山の台地上及び字塚原の河岸段丘上に所在する塚原支群（前方後円墳2基、円墳3基）と、現航空自衛隊新田原基地内にあった石船支群（前方後円墳3基、方墳1基：調査後消滅）、山之坊・竹渕・中村地区の台地縁や丘陵上及び台地裾部を中心とした山之坊支群（前方後円墳6基、円墳33基）また、新田原古墳群中、最も集中した紙園原・春日地区の標高73m内外の台地上や、一段高位の段丘の台地縁を中心に分布する紙園原支群がある。

当遺跡は、国指定史跡新田原古墳群に含まれるが指定が昭和19年で○○地番の内○畝○歩とされ、その面積はほぼ墳丘をさすものと考えられてきた。しかし乍ら古墳には墳丘にあわせ、円墳にあっては周囲に周堀が巡ることが確認され、前方後円墳にあっては周濠、



第1図 史跡新田原古墳群位置図

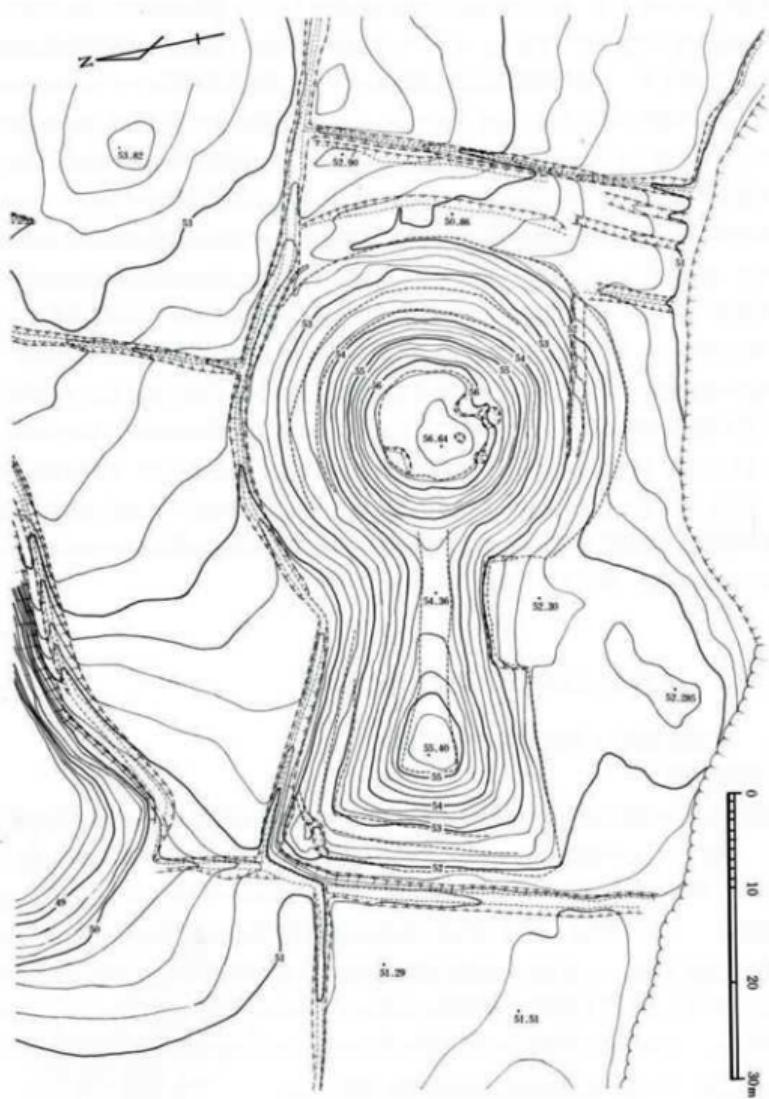
周堤を持つものもあり、様々な開発から古墳を保護するには、現況指定では対応できず資料の不備を嘆く状況となってきた。そういう状況のなか平成4年度には祇園原地区は場整備事業が計画され、古墳の確認は急務の状況となった。ほ場整備地区については古墳の周囲を大きく計画から除外することとなったが、こうした開発は大小を問わず今後とも計画されることが考えられ、古墳の保護を優先するには単なる保護管理から一步進んだ形で「保護活用」に進むのが時代の趨勢でもある。これに伴い当教育委員会では史跡（古墳）の再検討をすべく史跡新田原古墳群の周囲の確認調査および墳丘測量図の作成等基礎資料の収集、蓄積にあたることとなった。こうした成果をあつめて指定の拡大作業および公有化の推進に努めるため今年度からその基礎作業となる墳丘測量を史跡新田原古墳群第3・47・58・92号（前方後円墳）を中心に進めることとなった。第47・58号（前方後円墳）では周濠の範囲確認のため、一部試掘調査を実施した。調査は、平成5年7月より、塚原支群の第3号前方後円墳から始めた。調査にあたっては、個人の所有地に係るものも多く、畠地として利用されている土地もあり地権者及び耕作者の作物があいている期間を利用することとし、ご協力を頂いた。引き続き祇園原地下式横穴5号調査→祇園原支群第58号前方後円墳調査→祇園原支群第47号前方後円墳調査→祇園原支群第92号前方後円墳調査をおこなった。調査は、平成6年3月31日終了した。

### 第三章 確認および墳丘測量調査概要

#### 1. 塚原支群第3号墳（前方後円墳）

##### <位置と環境>

史跡新田原古墳群の最も東側に位置する塚原支群は、前方後円墳2基、円墳3基で構成され、標高7～9mの県道西都～富田八幡線の北側の河岸段丘面に1号（前方後円墳）2号（円墳：川原石積み）が所在し、比較差約40mの新田原面より一段低い台地上に3号（前方後円墳）、4号（円墳）、5号（円墳：後世の富田城築造時の変形を考慮しても前方後円墳の可能性が強い）、さらに一段高い標高約66mに6号（円墳：墳丘下に大きく壘塹抜ける）が所在する。第3号墳は、新田原の台地からL字状に派生した標高52mの舌状台地上に所在し、その東側先端部は中世富田城の取添えとして使用され、大きく濠を挟んで富田本城に続いている。北には地蔵池の谷が深く開析する。



第2図 第3号墳墳丘平面図

#### <調査の概要>

調査は、平成5年7月17日より、照葉樹を主体とした灌木に覆われた墳丘の伐採から実施し、約5日を要して測量に必要な空間を確保した。仮計測で任意にトラバースを組み、墳丘およびその周囲を25cmのコンター測定することとした。海拔水準は、比較差40m下を東西に走る県道西都～富田八幡線から移動し、座標も同様、移動し、第3号墳における任意の基準に繋げることとした。墳丘計測の結果、全長約67.6mを計り、後円部径約40.0m、くびれ部幅約20.0m、前方部幅約31.6mを計る。規底面より計測して後円部頂は約5.14cm高く、前方部最高点は約3.40m高くなっている。築成は2段築成で1段目法面には川原石が葺かれている。また後円墳頂には径約8.0m内外の平坦面を持ち、樹木の抜き取りとはあきらかに違った盗掘坑が南側に認められた。なお、周辺からは遺物等採集されていない。東側主軸の延長上には、僅かに窪みが墳形に沿って幅約4m認められるが全体に巡るものかは試掘調査等の結果にまちたい。遺物の出土はないが古墳の形態から、前期古墳の可能性が非常に高い。

## 2. 祇園原支群第47号墳（前方後円墳）

#### <位地と環境>

今回調査の47・58・62・63・92号墳は祇園原支群に属し、標高約73mの台地の中を北西から南東に小さく開析する谷と一段高位の標高90mの台地（三財原面）の縁や台地裾に分布する11基の前方後円墳を中心として円墳が散在する地域となっている。この古墳列上に沿って戸数37戸の祇園原の集落が広がっている。

この内、本墳は通称機織（はたおり）塚と呼称され前方後円墳で最も東に位置し、標高90mの台地が緩やかに傾斜する標高86～84mにかけて築成されている。

#### <調査の概要>

調査は、平成5年12月より、春に伐採した照葉樹を主体とした灌木の焼却処理から実施し、測量に必要な空間を確保した。主軸に基点を設定し、墳丘周囲に任意に基準点を配置し、平板により、墳丘およびその周囲を25cmのコンター測定することとした。海拔水準は、祇園原第56号北の仮基準を使用。

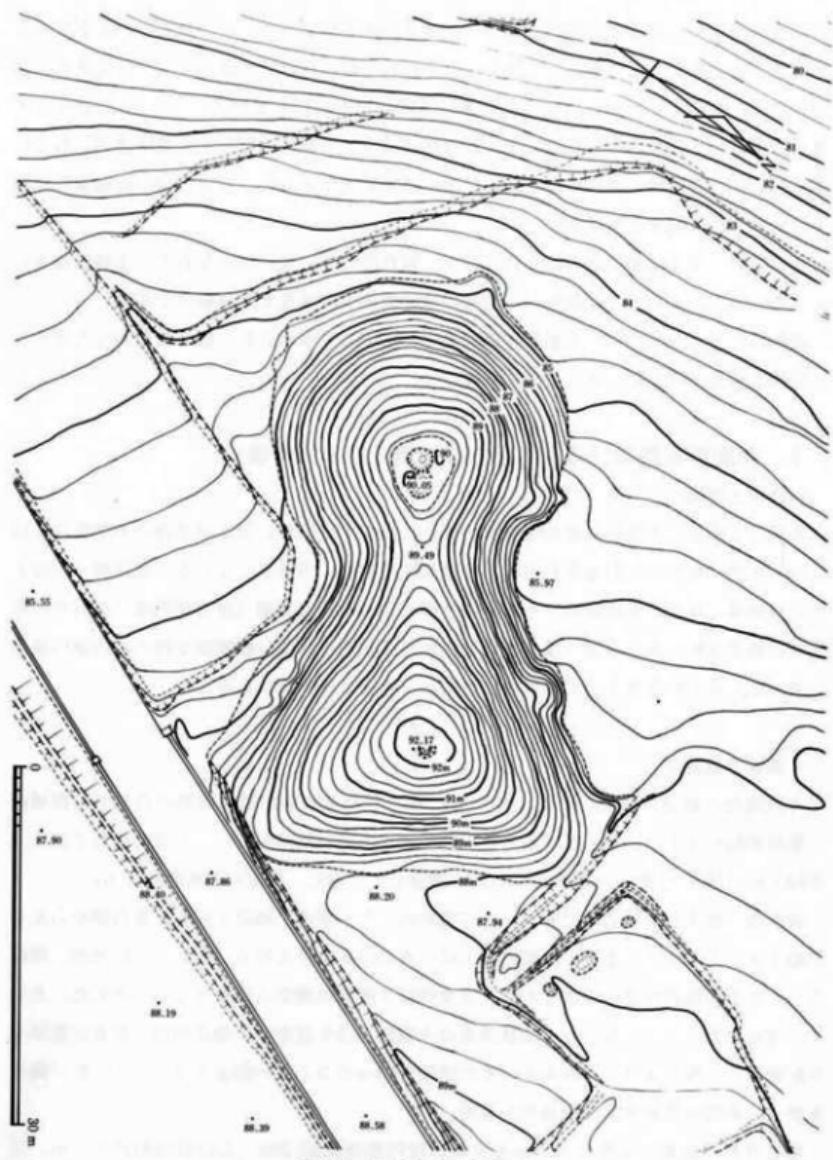
墳丘計測の結果、前方部が大きく広がるタイプの古墳で全長約49.6mを計り、後円部径約24.8m、くびれ部幅約16.4m、前方部復元幅約31.6mを計る。規底面より計測して後円部頂は約4.00m高く、前方部最高点は約5.17m高くなっている。横より見ると墳形



※ ■ は埴輪が確認されている古墳

0 300m

第3図 祇園原支群古墳分布図



第4図 第47号墳墳丘平面図

は前方部の異常に発達した観を受けるが古墳基底面も傾斜しており、基底面の確実な設定を追求する必要がある。築成は2段築成と思われるが、明確な2段目テラスは現状では認められず、葺石も認められない。また後円墳頂の平坦面はあまり広くなく、径約2.0m内外の盗掘坑が2箇所認められた。また前方部墳頂上にも同様盗掘坑が1箇所認められている。なお、この盗掘は地元のかたの話によると昭和6年とされ、持田古墳の盗掘事件と軌を一にしており関係が興味深い。

このほか、墳丘裾部に前方の左右に各1、縁部に1、後円部に左右1、主軸延長上に1、その他1のトレンチを設定し、周溝の確認調査を次年度まで継続中である。

遺物は、トレンチの中でも裾部に近い部分に集中して採集され、猪・馬等の足と思われる埴輪1点も出土している。（現在整理中）

### 3. 祀園原支群第58号墳（前方後円墳：62・63号墳）

#### ＜位地と環境＞

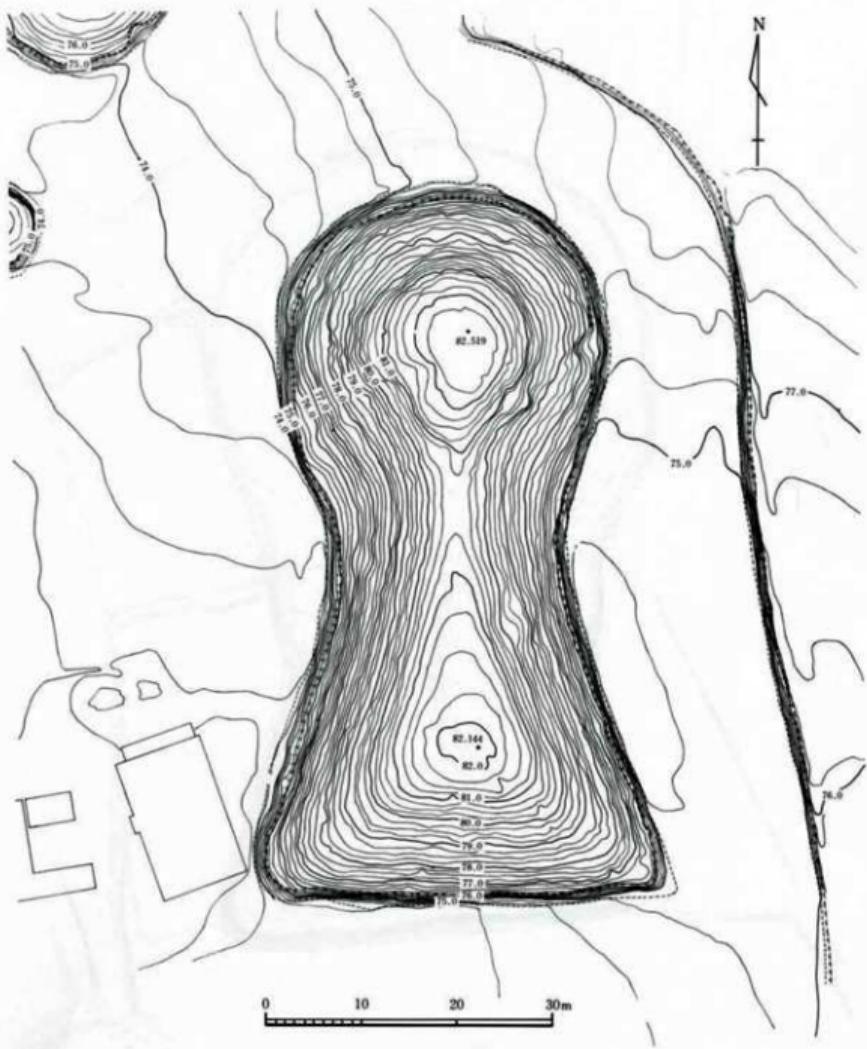
本墳は、南北に紙園原の台地を開析する谷に派生する南東および北西の小開析谷に挟まれた非常に緩やかな斜面を利用し、台地裾部を掘り、周濠としている。北北東、一段上の台地縁には、台地接続部分を掘り切り築造された第58号墳（前方後円墳）が有り、南西には整美な形の第56号墳（前方後円墳）が所在する。本墳は紙園原支群の前方後円墳列のあたかも中心的位置を占める位置にある。主軸をほぼ南北にとる。

#### ＜調査の概要＞

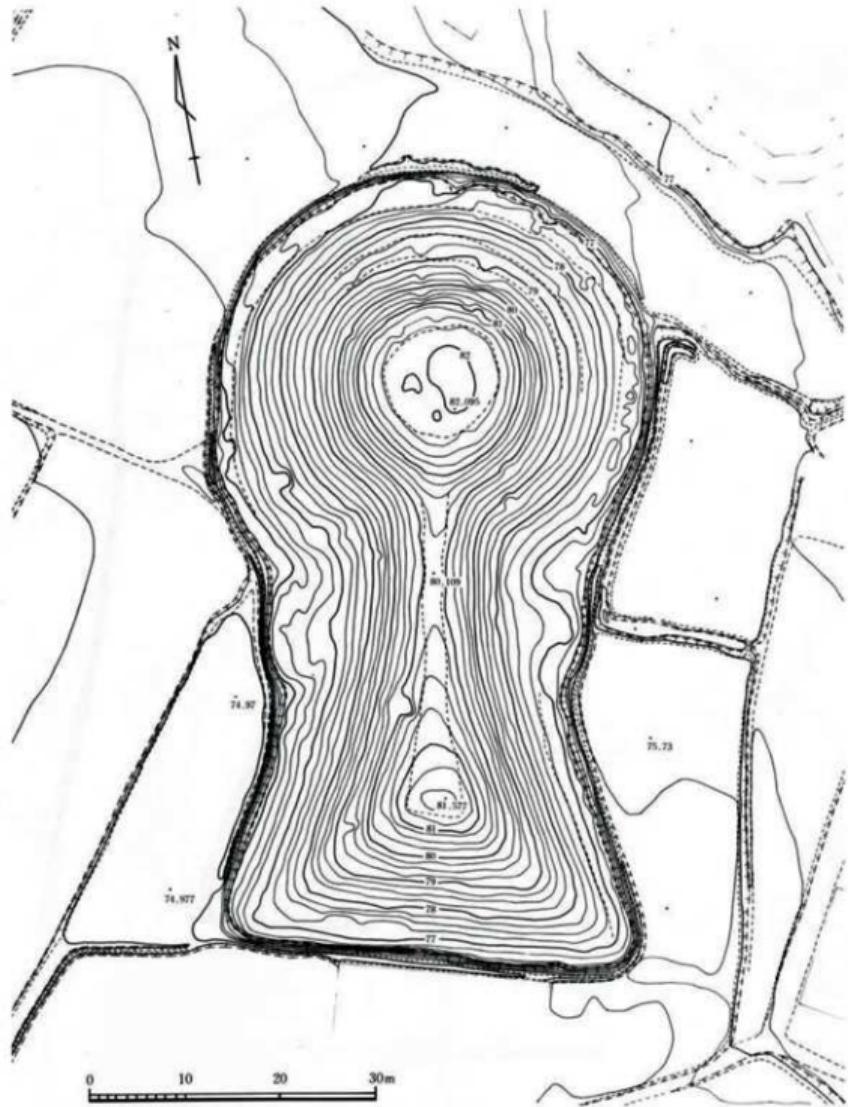
今回調査の第58号墳は、百足（むかで）塚と通称され新田原古墳群の内最も円筒埴輪・形象埴輪の出土が伝えられる前方後円墳で明確な橋型周濠を持つことで知られていた。第62・63号墳（円墳）は復元外堤の外に隣接して立地し、陪冢の可能性がある。

調査は、雑木を主体とした灌木・竹に覆われていた。周濠の確認を目的に後円部から左右に幅1mのトレンチ、主軸の北側延長上に一本の計三本を入れることとしていたが、周濠内にかかる畠地耕作者の要望もあり、完全伐採・焼却処理から実施することとした。あわせて墳丘測量することになった。測量調査は主軸に基点を設定し、墳丘周囲に任意に基準点を配置し、平板により、墳丘およびその周囲を25cmのセンター測定することとした。海拔水準は、紙園原第56号北の仮基準を使用。

墳丘計測の結果、全長約76.4mを計り、後円部径約33.2m、くびれ部幅約25.6m、前方部幅約43.6mを計る。規底面より計測して後円部頂は約8.52m高く、前方部最高点は



第5図 第58号墳墳丘平面図



第6図 第92号墳墳丘平面図

約9.15m高くなっている。横より見ると墳形は後円部が僅かに高い觀を受ける。北側および東側をはじめ、南側前方部裾を含めて各々約2mの耕作による開削を受けているため裾部未確認の現状では全長復元を約80.4mとしておく。築成は2段築成で明確な葺石は認められず二段目テラスには円筒埴輪列が並ぶものと思われる。また後円墳頂の平坦面は径約7m内外で南西方向に一部崩れた部分があり盜掘の可能性がある。またそこには人頭大やそれ以上の川原石が裾に集められた状態にあり、横穴石室の可能性もある。トレントチは次年度継続調査。

#### 4. 新田原古墳群紙園原支群の埴輪

##### (1) 新田原47号墳の埴輪

過去、本墳では猪形埴輪が出土したとの伝承があり、今回の調査で動物の足と思われる形象埴輪が検出されている。ここで調査で得られた埴輪については整理中のため、確認できる埴輪の数に制約があった。総数は4点であり、口縁部2点、底部1点、タガ部1点である。焼成は須恵質のものはないが、無黒斑で堅緻なものでしめられるため、窯窯焼成であろう。全体形が判明する破片はない。1・2は端部に強いヨコナデを加えた口縁部であり口唇部側面にも窪みが見られる。タガは実測図に掲載していないが、M字形で突出が小さいもの(6mm以下)が多い。また、3・4のタガは断続ナデによるものである。4の外側は緻密な板ナデ調整され、内面は底部から上方に指ケズリが施されている。底部調整はなされていない。

外面調整は一次タテハケのみであり、ハケ目は1cmあたり5本程度とやや粗いものが多い。

##### (2) 新田原58号墳の埴輪

掲載した円筒埴輪のうち1・3・6・7・8は、墳丘測量時に、倒木などを除去した際に後円部北側2段目テラス上で検出したものである。1・3・6・と7・8はそれぞれ同位置で採集したものである。また、1と3は色調や外面調整などから同一固体と想定される。

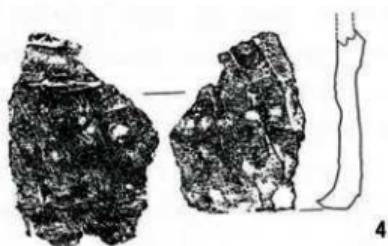
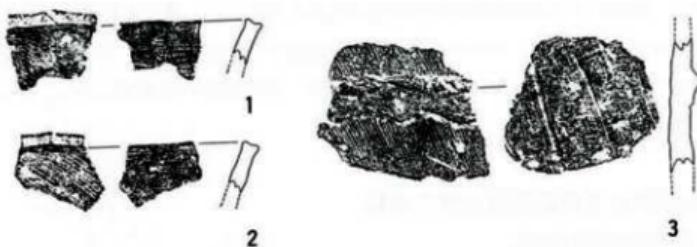
底部径は3~6が約20cm内外であり、7・8は約17cmである。全体形がわかる資料はない。無黒斑で埴質と須恵質のものがあるが、後者が多いことから窯窯焼成であるようだ。

1・2は口縁部である。端部はヨコナデによって面をなし中央がくぼむ。

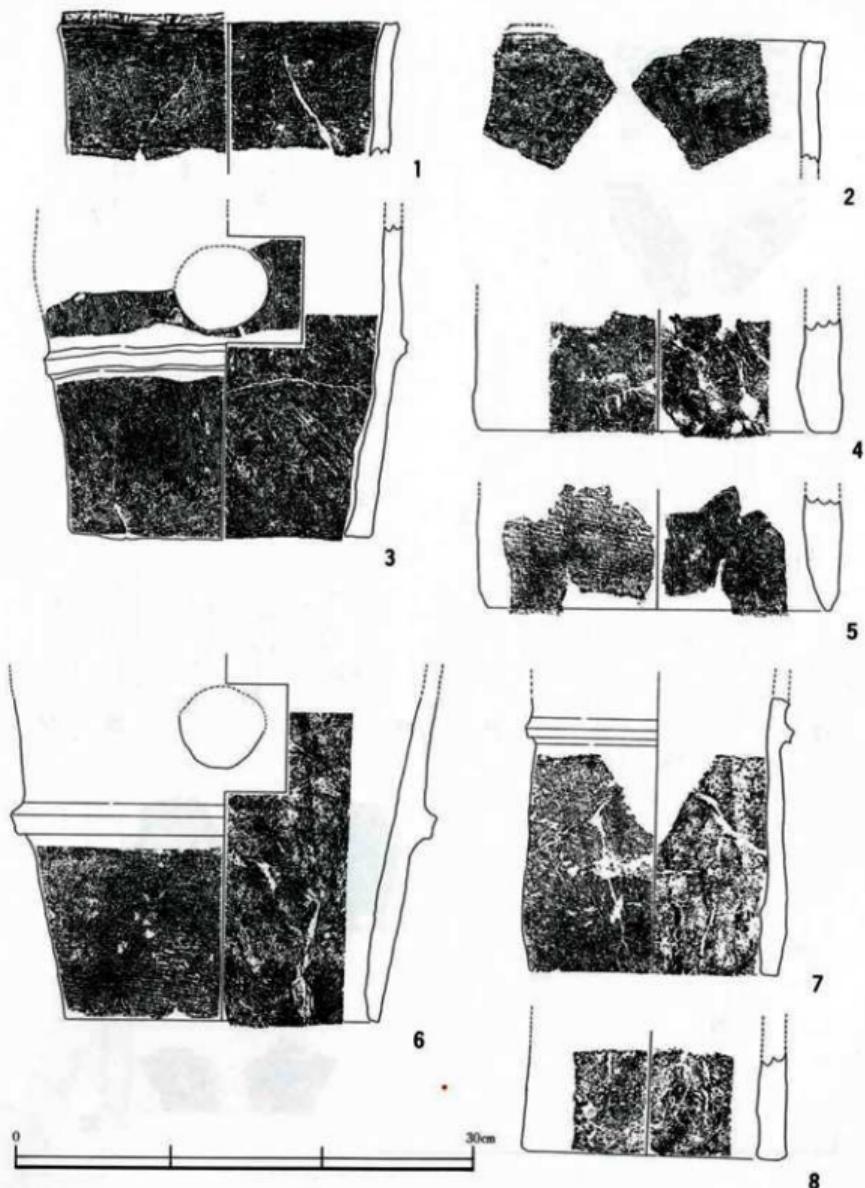
タガはM字形で突出度が高いもの(6mm~10mm)が多く、6は特に高い。

底部は指おさえのもの(3・4・7・8)がある。平行線タタキが強く側面が面をなしているものもある。

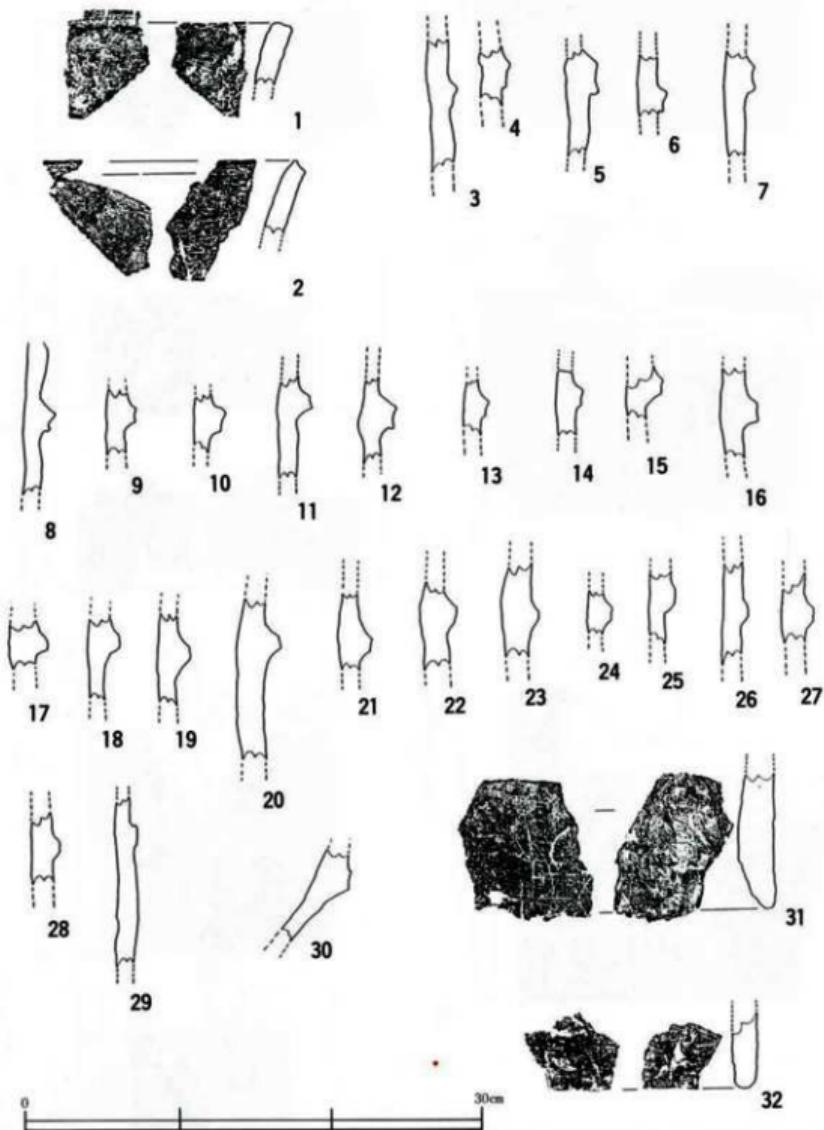
外面調整は一次タテハケのみであり、そのちタガをヨコナデではりつけている。ハケ



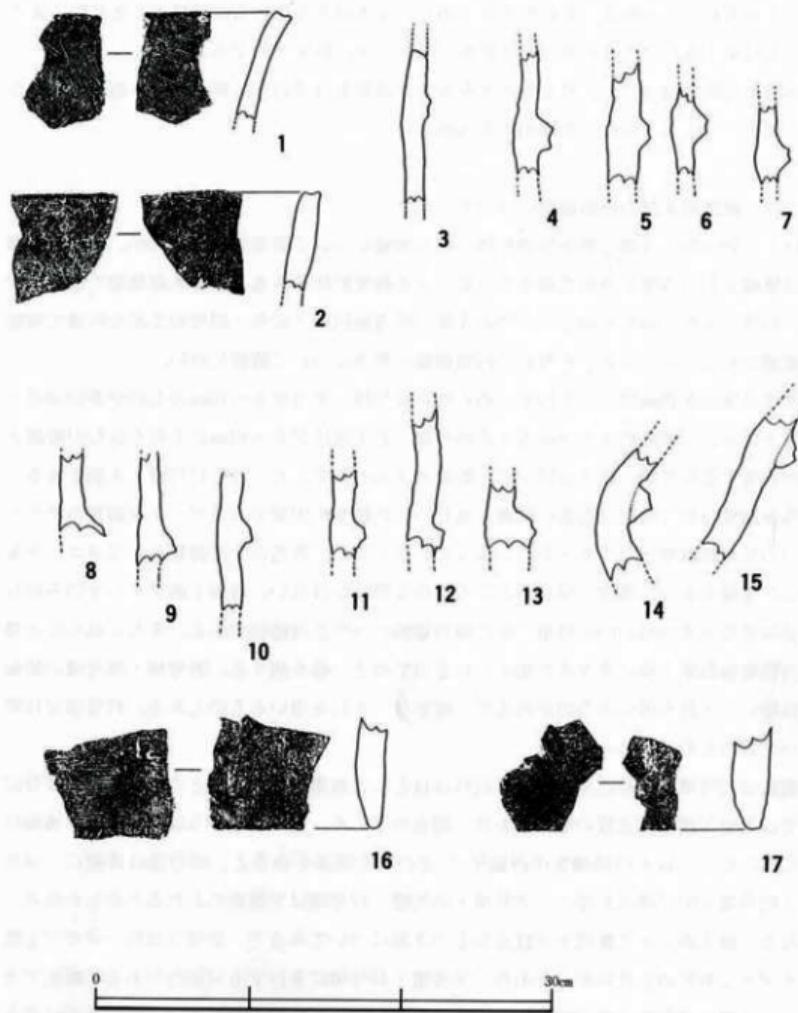
第7図 第47号墳採集埴輪実測図



第8図 第58号墳採集埴輪実測図



第9図 第62号墳採集塙軸実測図



第10図 第63号墳採集埴輪実測図

目は1cmあたり7本程度のものが大半であり、4本以下の粗いものはほとんどない。また、5・6は第1段にタタキが施される資料であり、平行線タタキである。

本墳の円筒埴輪はしっかりしたタガを持ち、透孔もほぼ円形に穿孔し、外面調整のハケ目が細かいことなど退化した様相がみられない。

### (3) 紙園原支群の円筒埴輪について

以上、新田原47号墳と新田原58号墳の円筒埴輪について簡単に観察したが、紙園原支群では埴輪をもつ古墳が首長系譜を追って、ある程度把握できることは大変重要である。現在、47号・56号・58号・59号・92号の5基の前方後円墳と62号・63号の2基の円墳で埴輪が確認されている。以下、それらの円筒埴輪の形態について概観したい。

タガは突出が10mm以上のものでしめられる92号墳、突出が6~10mmのものが多い58号・62号・63号、三角形のタガが出現する59号墳、若干突出が6~10mmのものも含むが断続ナデが出現する56号墳、低平なM字形と断続ナデのものでしめられる47号墳と大別できる。

外面調整は92号墳では器表の剥離が激しいため観察が困難であるが、1次調整のタテハケのち2次調整としてナデをおこなっているようだ。外面の2次調整としてヨコハケを施した埴輪をもつ古墳は、現在のところこの支群中にはない。外面1次タテハケのみのなかで58号墳とその周辺の62号墳・63号墳の埴輪のハケ目は緻密である。またこれらの古墳の円筒埴輪は第1段にタタキが加えられる点で他と一線を画する。59号墳・56号墳の埴輪には粗いハケ目を用いるものがあるが、緻密なハケ目を用いるものもある。47号墳では粗いハケ目のもので占められる。

焼成は92号墳の埴輪に黒斑がある以外はほとんど無黒斑である。とくに58号墳と62号・63号では器壁が厚く須恵質の埴輪があり、現在のところ、他の古墳からはこのような埴輪はみられない。以上の埴輪を川西編年<sup>(1)</sup>との対応関係をみると、92号墳はⅢ期に、58号墳・62号墳・63号墳はⅤ期に、59号墳・56号墳・47号墳はⅤ期新にあたるとおもわれる。

なお、最下段タガに断続ナデ技法をもつ3基についてみると、59号では同一タガでも断続ナデと三角形の形状の部分があり、56号墳・47号墳に先行する可能性があるが断定できない。古墳の埋葬施設等が明らかでないので確定できないが、92号墳は5世紀前葉にさかのぼるかもしれない。しかし日向の窯窯焼成の採用がやや遅れるとみられる点から5世紀後葉までの年代幅を想定しておきたい。58号墳・62号墳・63号墳については5世紀末~6世紀初頭と想定される宮崎市下北方1号墳の円筒埴輪にタタキの例<sup>(2)</sup>があることからこれに平行する時期であるだろう。断続ナデの一群は6世紀前葉以降とする川西氏の指

摘<sup>(3)</sup>と九州ではこの手法の埴輪がおおむねTK10型式前後と考えられることから、これに従う。

<注>

- (1) 川西宏幸 「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第62巻3・4号 1978  
(2) 永友良典 「下北方古墳-遺物編-」 宮崎県総合博物館 1990  
(3) (1) に同じ

## 5. 紙園原地下式横穴5号調査

<調査に至る経緯>

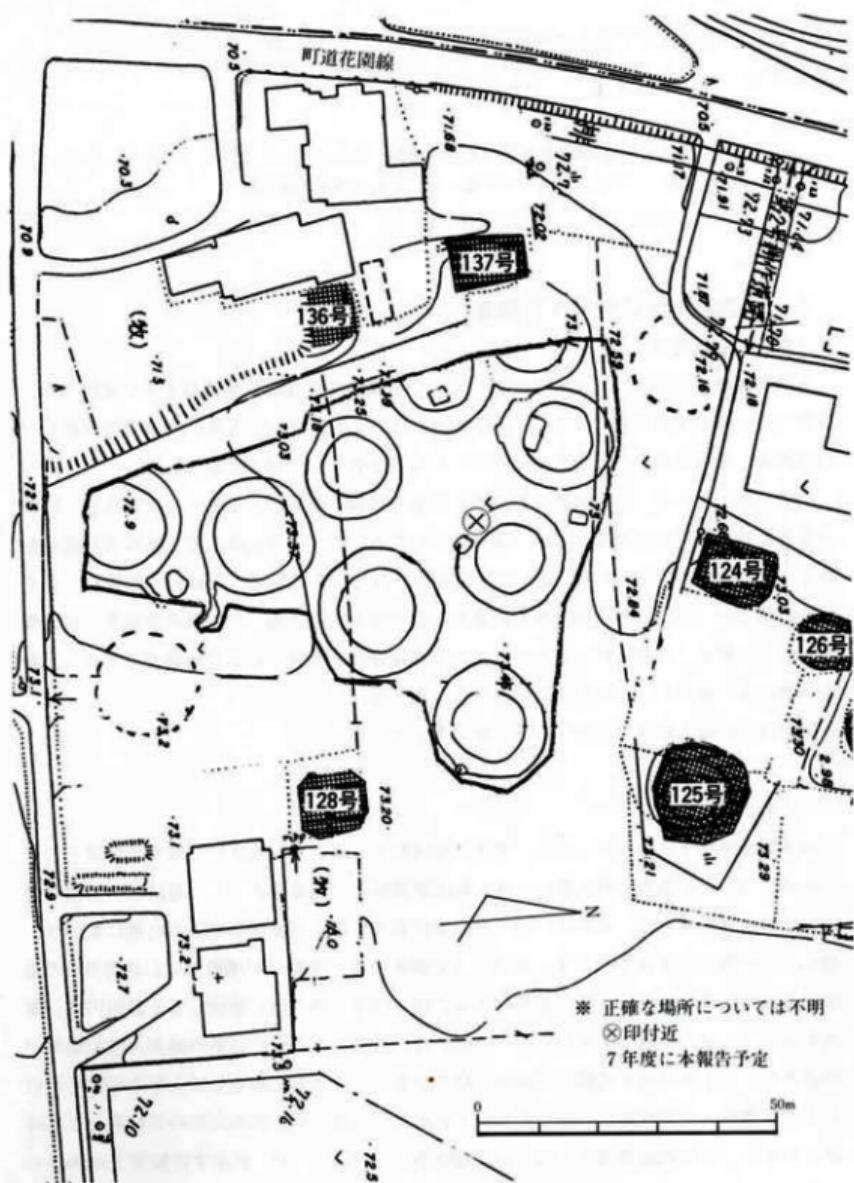
本遺跡周辺については、平成4年度において紙園原地区畠地基盤整備事業が実施され、事業に伴う事前発掘調査により、面積約3,000m<sup>2</sup>のなかに径20m内外の円墳の周溝部分が14基隣接して確認され、事業から保存のため除外されていた地区である。

平成5年8月下旬、同地の雑草の刈取中に地下式横穴墓らしき落ち込みがある旨、町教育委員会社会教育課に連絡があり、現地に赴いたところ、地下式横穴墓玄室の天井部が幅約30×100cmにわたって崩落しているのが確認された、玄室東壁に人頭大の遺物らしきものも確認され、周囲の残る天井部も崩落を予想させる状況であった。教育委員会では、現地の保全に努め、周囲の状況からそのまま現地保存は不可能であるため調査を実施し、調査後埋め戻し保存し、今後の活用に供することとなった。

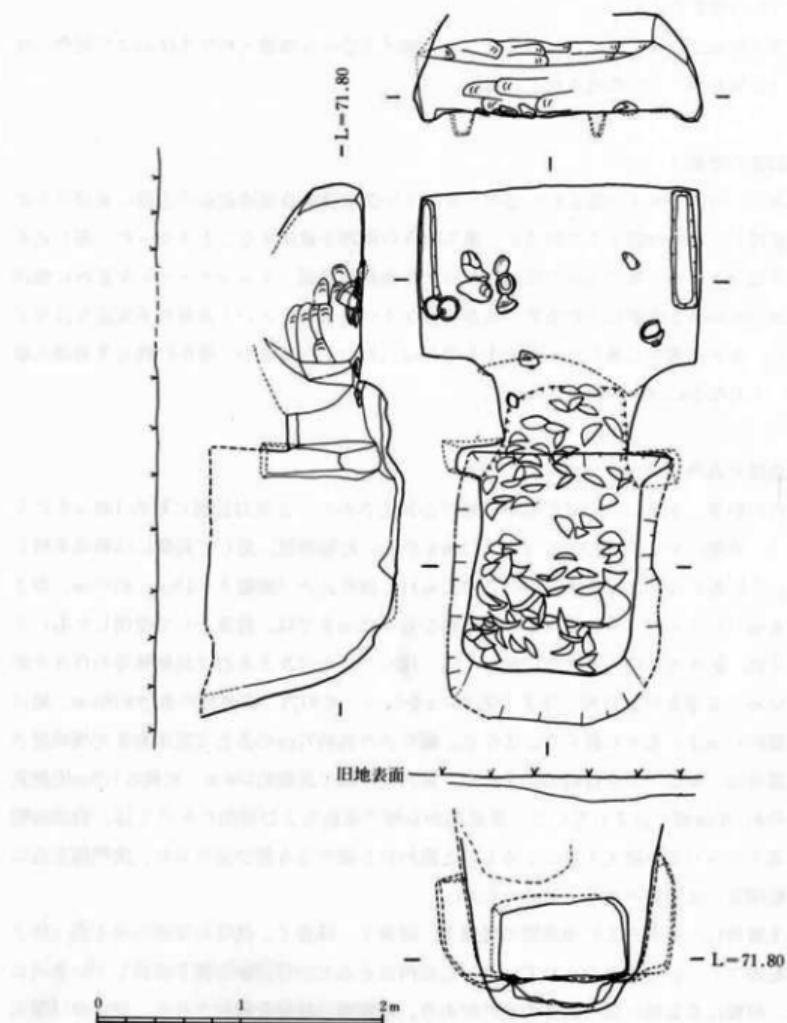
調査は、平成5年9月下旬～10月上旬のなかで行なった。

<立地と環境>

紙園原地区地下式横穴墓5号は、集落の地区割りでは、春日地区に付属するが群としての区割りは、県の調査の群区割りに従い紙園原地区の一連遺跡とした。遺跡は、前掲の史跡新田原古墳群47・58・92号ほか前方後円墳13基の所在する紙園原地区的台地に繋がり、標高72mの高位に所在する。また周辺には史跡新田原古墳群の円墳群が北に約250mの紙園原地区共同墓地周辺に13基、北西約70mには、円墳6基、西に隣接して2基の円墳、東南約50mに1基の円墳が所在する。この間には、径約20m内外の15基の滅失古墳の周溝が確認され、内1基は地下式横穴が確認されている。また北西に隣接して人頭大の礫を小口および長側板として使用し、屍床に5～10cm大の円礫を敷き詰めた形の石棺墓も1基確認されている。紙園原集落との間には字曲久保（まがりくば）が示す比較差2m内外の開析谷が入る。南側約200mには新田原台地を南北に大きく開析する藤山川の谷の谷頭部



第11図 紙園原地区地下式横穴5号遺跡位置図



第12図 祇園原地区地下式横穴5号造構平面図

分に面している。谷底より比較差10~20mの谷頭の周囲には、祇園原支群の一角を形成する春日の円墳群が広がる。

古墳立地面はほぼ平坦面となっており、当地区で盛んな酪農・和牛生産および肥育に使用される牧草地として利用されている。

#### <調査の概要>

調査は、周囲の表土の除去から進み、平成4年度確認調査後確認面の上面に保存のため前面被覆した黄色砂質土まで除去し、落ち込みの原因を確認することとなった。落ち込んだ天井部の上には、落ち込みの原因となった特殊耕転機械（トレンチャー）が東西に幅20cm、深さ約60cmまで耕耘され玄室の天井を僅か4~5cm残すという非常に不安定な状況であった。まず玄室内に落ち込んだ表土を除去はじめたが作業途中、僅かに残る天井部も崩落し、天井部を広げての調査となった。

#### <遺構と遺物>

調査の結果、1基の平入式の地下式横穴が検出された。玄室は長軸に幅約198cmを計り短軸は、東側にやや広く120cm、西に112cmを計る。短軸側壁に面して両側には箱式木棺と同様、小口板の設置に関係するものと考えられる掘り込み（底幅7~10cm×約75cm、深さ7~8cm）が見られ、それに対応する奥壁から約75cmまでは、屍床として使用したものと考えられ、屍床内には人頭大の川原石2点（枕石？）の存在とあわせ長側板等の存在を想起させる。玄室奥壁より竪穴床まで約340cmを計り、その内、羨道部の長さ約85cm、幅は羨門部約85cmより玄室に緩やかに広がる。掘り込み高約72cmのあと玄室床面まで埋め戻され、埋葬時の羨道の高さは約55cmを計る。竪穴は床面で長軸約130cm、短軸約110cm旧地表面より約130cm掘り込まれていた。羨道部から竪穴床面および壁面にかけては、約22cm幅を基本とするU字型鋤先工具によるものと思われる掘り込み痕が認められ、羨門部左右には、板閉塞に係る掘り込みも認められた。

出土遺物は、玄室内より須恵器の堤瓶1、坏身2、坏蓋1、高坏の坏部のみ1点（坏として転用？）の計5点が出土している。この内ほとんどがほぼ原位置を維持しているのに比べ、堤瓶は羨道部に同一固体の破片があり、埋葬時の破碎を想起させる。高坏の坏部および坏身の2点には、内側にベニガラの朱色が付着し、内、坏身のひとつには19mm×16mm、厚さ4mmと25mm×22mm、厚さ6mmの扁平な朱玉2個が検出されている。なお、土師器片は検出されておらず、竪穴部からは遺物は出土していない。須恵器の年代観は、身・蓋がや

や大型化する時期で九州編年のⅢB期に相当する時期とみておきたい。

遺物についてもまだ整理中であり、遺構についてもその在り方等検討が必要である。また、調査した遺構の周辺は、平成4年度祇園原地区のは場整備に伴い事前発掘調査され、平成7年度に報告書の刊行が予定されており、その成果にあわせ報告したい。

## 6. 春日地区所在の地中レーダー探査結果について（概要）

### <調査に至る経緯>

本遺跡は、国指定史跡新田原古墳群に含まれる。当地は、国指定史跡新田原古墳群第156～160号墳の周辺にあたり、周辺でも最高位に位置している関係上、滅失古墳の存在も考えられる場所であるが、指定地区外となっていた。平成4年8月、春日地区の北に隣接する祇園原地区において、は場整備事業が実施されたが事業に関連して今後、農地保全事業（排水路整備関係）がこの春日地区の排水の悪い史跡新田原古墳群第159号墳（円墳）周辺の畠地にも計画されつつあることを知り、本件について県教育庁文化課に相談の結果、今後の開発部局との調整に必要な資料の収集が確認された。しかし、畠地のほとんどは当地区で盛んな和牛の肥育・生産、酪農の牧草生産地となっており、植え替えの一時期を除き一年中牧草が植え付けられているため、予想される周溝や滅失古墳の確認のためにはトレンチ等による試掘調査は、困難であり、作物に影響の少ない地中レーダー・電気探査等の調査方法を検討した。この内、「地中レーダー探査」は、県内でも本町北原牧地区遺跡をはじめ、都城市築池遺跡等で多大の成果を収めていることから、本探査法を導入した。探査の結果、周溝の範囲と滅失古墳1基を確認することが出来た。

調査は、平成5年11月9日～12日の間行なった。

### <立地と環境>

調査地は、新田原古墳群中、最も集中した祇園原・春日地区の標高73m内外の台地上を中心に分布する祇園原支群の一角（春日地区）で今回調査の158・159・160号周辺地区は、標高70m内外の祇園原台地を北から南に大きく開析する谷の谷頭に沿って取り込まれるように分布する円墳を中心とした地域となっている。北西約100mには花園地下式横穴1号（昭和63年調査）も確認されている。なおこの古墳の周囲は戸数24戸の春日の集落となっており、古墳と共に存している。（第13図参照）

縮尺 1/2500



第13図 新田原古墳群（春日地区）分布図

### <調査の概要>

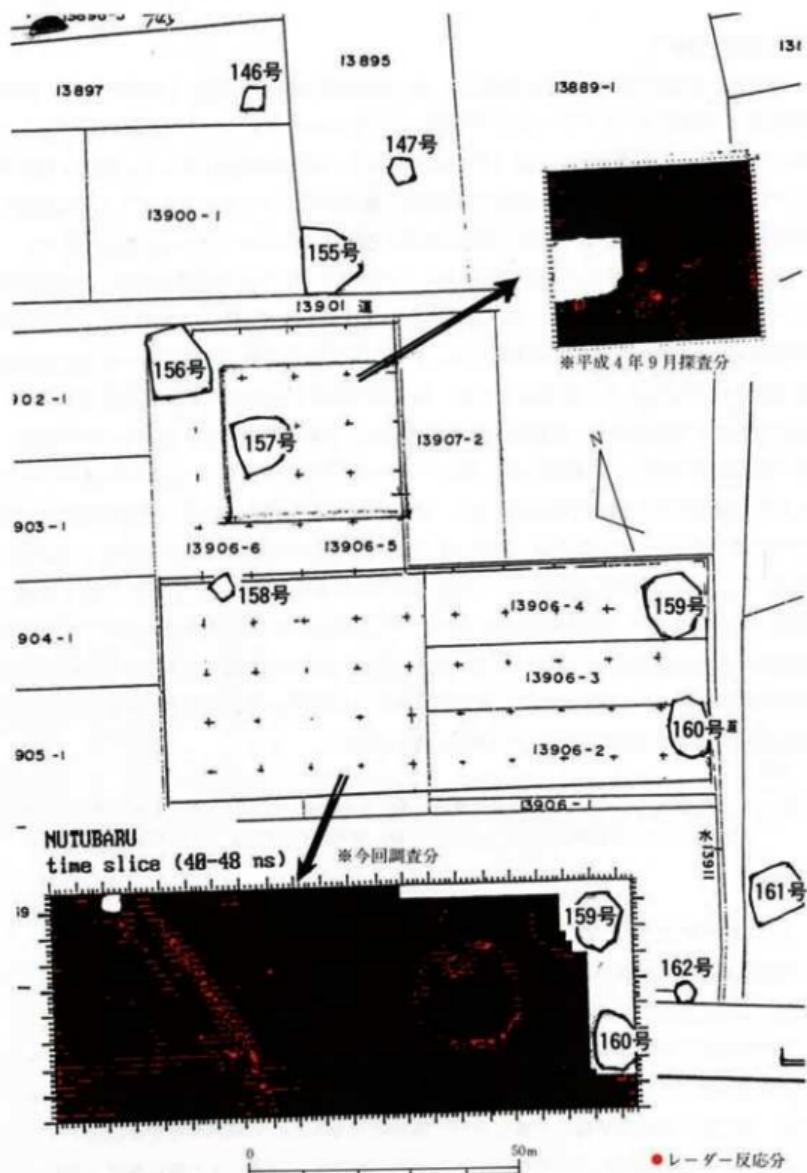
調査は、農地保全関係事業が計画されている祇園原支群春日地区（第158・159・160号墳周辺）の牧草（イタリアンライグラス）の刈り入れの終了したほぼ方形の畠（約4,700m<sup>2</sup>）にグリッドを設定し、平成5年11月9日より、現地調査を行なった。調査・解析は、石川県中島町のマイアミ大学地質音響研究所中島研究室ディーン・グッドマン氏に依頼し、解析に当たっては他の調査で来宮中の国立奈良文化財研究所 西村 康氏に御助言を頂いた。

調査は、アメリカGSSI社製のSIR-8型パルスレーダー装置を用い、300MHzアンテナを使用して測定した。深い層位にある遺構を漏れなく探るために、データ採取の時間は160nsとした。また、本遺跡では、普遍的な火山灰起源の土壌における公称電波伝播速度4cm/ns（1ナノ秒当たり4cm）を基準にすると3mよりも深い位置まで探ることができたと推定される。解析結果の表示方法は、①測定断面表示、②レーダー平面図、③三次元表示を行い、本概要では、②レーダー平面図（40～48ns：見かけの深さ80～96cm）を地積図に移し換えて略表記した。（第14図参照） 探査の結果、周辺に現存する古墳の周溝をはじめ、第160号墳（円墳：地下式横穴墓の可能性あり）の豊穴部？も認められた。またこの両円墳に隣接して、径20mの滅失古墳の周溝および主体部（地下式横穴玄室）とおもわれる部分も確認された。しかしながら、この主体部分については、豊坑に対応する部分が認められておらず単純に玄室とするのには問題点を多く残している。第159号墳（円墳）については、この調査で期待された周溝は確認できず、前記の2基の検証を含め、今後の発掘調査等により確認していきたい。

注 本報告は、マイアミ大学地質音響研究所中島研究室ディーン・グッドマン氏より、報告がなされているが紙数の関係により、今回は、概要にとどめたい。（有田記）

### 7. まとめにかえて

今回の調査は、周濠部分の保存のための確認調査であり、初期の目的は達することができた。またあわせて4基の詳細な墳丘測量図の作成は、他の古墳との比較に有効であり、この成果で第3号墳は前期まで遡ることが予想されるものとなった。今後もさらに基礎資料の整備に進みたい。その他の58・47・92号墳の前方後円墳に円筒埴輪・形象埴輪が確認され、前年種々の形象埴輪片が検出された第56号墳をあわせて類例を増やすこととなった。これまで若干の形象埴輪の出土が伝えられてきた新田原古墳群にまた新たに確実な資料を加えた。今後、面的な広がりと遺構に伴う遺物とを確認していきたい。



第14図 地中レーダー探査解析図



図版1 第47号墳全景（南東から）



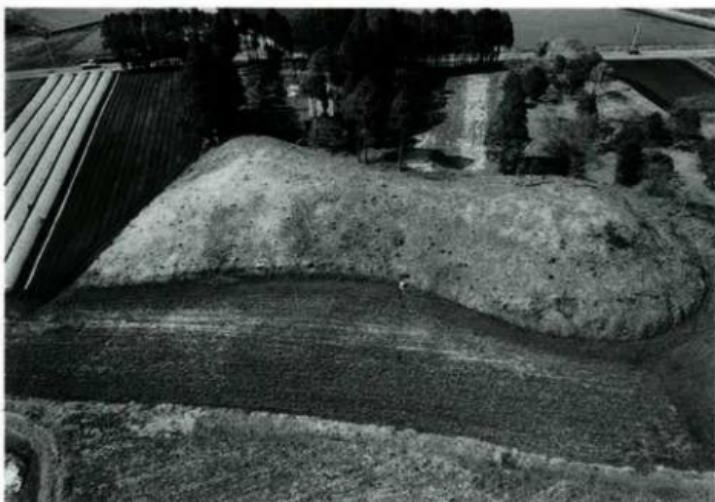
図版2 第47号墳全景（空中写真）



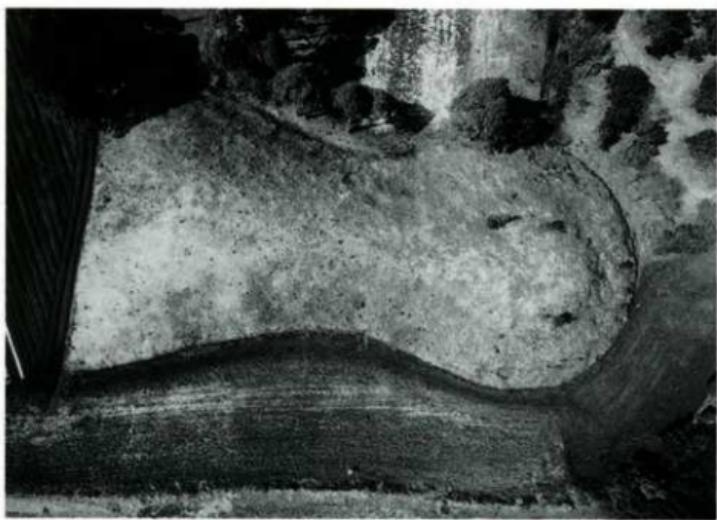
図版3 第47号墳後円部（盗掘坑）



図版4 第47号墳第7トレンチ埴輪出土状況



図版5 第58号墳全景（上から）



図版6 第58号墳全景（空中写真）



図版7 第58号墳試掘調査状況（北→後円部）



図版8 第58号墳試掘調査状況（東周堤上→後円部）



図版9 祇園原地下式5号竪穴部



図版10 春日地区地中レーダー調査作業



図版11 第48号墳全景（空中写真）



新富町文化財調査報告書 第16集

国指定史跡新田原古墳群確認調査に伴う調査概要報告書

新田原古墳群（確認調査）

塚原支群 3号墳

祇園原支群 47・58・92号墳

祇園原地下式横穴5号

春日地区地中レーダー調査

発行年月日 1994年3月

発 行 宮崎県新富町教育委員会

印 刷 布印刷センタークロダ

